

文化施設を中心とした文化観光の在り方に関する検討会議（第1回）

令和元年11月25日

- ※ 座長に島谷委員、座長代理に丁野委員が選出された。
- ※ 「文化施設を中心とした文化観光の在り方に関する検討会議運営規則（案）」が了承された。

（傍聴者入室）

【島谷座長】 改めまして、この検討会議の座長に就任させていただくことになりました、島谷でございます。どうぞよろしくお願いたします。傍聴の方が多いというので、非常に関心が強いということで、私どもとしても非常にうれしく思っております。

開会に当たりまして、文化庁から一言、御挨拶を頂ければと思います。今里次長、よろしくす。

【今里次長】 文化施設を中心とした文化観光の在り方に関する検討会議の第1回の開催に当たりまして、文化庁を代表して御挨拶を申し上げます。

皆さん御存じのとおりでございますが、平成29年に文化芸術振興基本法が改正されて文化芸術基本法となっております、その基本理念の一つといたしまして、「文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない。」ということが追加されたわけでございます。文化と観光やまちづくりの連携は極めて重要と考えているところでございます。文化資源を磨き上げて、国内外の多くの人に知ってもらい、見てもらう、体験してもらう、こうした機会を提供することで、観光やまちづくりへのポジティブな影響が期待できる。こういう観点から、この間、日本遺産ですとか日本博などの多くのテーマで、文化庁は観光庁さんと緊密な連携を図っているところでございます。

また、去る11月8日には文化審議会に博物館部会を立ち上げまして、博物館の制度的な課題と今後の振興方策の検討に着手をいたしました。その際、博物館の振興施策は今日的な課題も踏まえながら整理・対応することが期待されており、そのうち、観光、まちづくりとの連携施策について、機動的な体制を整えて集中的に検討してはどうかという提起がございます。そうしたことが、この会議の設置につながっているところであります。文化庁

といたしましては、来年度に向けた予算や施策として、博物館などの文化施設が活躍していくことで文化振興と観光振興の双方を進める施策、これを検討したく思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

以上でございます。

【島谷座長】 どうもありがとうございました。

じゃあ、観光庁のほうから、片山さん、よろしくお願ひします。

【片山参事官】 観光庁の外客受入担当をやっております、片山と申します。座って、失礼します。

皆様、御存じのとおり、訪日外国人旅行者数は、2020年4,000万、2030年6,000万の目標を掲げまして、国挙げて観光施策に取り組んでおります。また、2018年、昨年には3,000万超えということで、6年超えでの過去最高を記録しまして、また、消費額も4兆5,000億円を超えるということで、推移をしております。博物館、美術館は、地域にとっては大きなコンテンツだという場合でありますけれども、一方で必ずしも観光という観点から見られていないところも多々あったような感じもいたします。例えて申しますと、インバウンドの誘致の関係では、多言語対応とか、キャッシュレス、Wi-Fiとか、そういう基盤が必要になっておりますけれども、博物館の中もともかくながら、我々、空港から観光地、また、博物館に至る交通機関であるとか、観光地の周りというものも取り組んでいかなきゃいけない。そういう連続性も大切だと思っておりますし、また、博物館だけ、美術館だけ、点で来訪されるということだけではなくて、正に地域の周りも周遊していただいて、また、消費していただいて、地域にも貢献するというふうな観点も、地域からも要望あるところがございます。こういった観点もありまして、こういう場で観光と文化施設の融合を図るといふような検討をされることは、非常に我々も、楽しみといたしましうか、積極的にやっていきたいと思っております。皆様のお知恵を頂きながら、是非、検討を深めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

【島谷座長】 ありがとうございます。

じゃあ、私の方からも、一言、御挨拶させていただきます。

文化観光という言葉を用いて文化庁さんと観光庁さんがこうした検討の場を設けたことは、従来にない試みで、大変良いことだと思っております。先日、文化審議会に博物館部会が発足いたしました。先ほど今里次長から御案内あったところがございますが、そこで審議を開始してございまして、そこでは博物館の持つ可能性と現在直面している課題を丁寧

に議論することにしております。体力の有るところと無いところがございまして、一方的に進むということではなくて、丁寧に論議を進めていきたいというふうに考えております。こうした議論でも観光との関わりは極めて深いものでございまして、よく、文化か観光かということで文化財を浪費するのではないかというような考え方がありますが、文化庁が抱えて文化財保護法においても保存と活用はセットで考えるべきことだというふうに考えておりますので、保存ありきではあります、それをどういうふうにして用いていくかというのが非常に重要なことで、保存するための理解を得られることにもなるかと思っております。この二つを対立して考えるのではなくて、多くの来館者を得ている施設は多くございせんが、そういうものがございまして。また、海外の人から注目される施設も少なくございせん。そうしたことが実現できるような体力を博物館などの文化施設がどうやって付けていくか。体力というのは、経済的にも、人的にも、そういったことございまして。国がそれをどうやって支援していくか、具体的に議論できればと、私は考えております。多くの課題を整理しながら議事運営を進めてまいりたいと思っておりますので、各委員におかれましては、何とぞお力添えのほど、よろしくお願いいたします。

それでは、議論を始めるに当たりまして、事務局から資料説明を改めてお願いいたします。

【榎本課長】 お手元の資料、何枚かめくりますと、資料3という横長の資料の固まりがございまして。こちらをめくりますと、それぞれページ番号を付しておりますので、ざっと御紹介したく思います。

資料3、1枚めくりまして、1ページ、1ポツ、「文化観光」の推進の検討と付けております。文化観光という言い方は初見と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、最初の白丸に付けております、平成24年の観光立国推進基本計画に「文化観光とは、日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とする観光」という記載がございました。博物館などの文化施設が多様な文化資源の展示や解説を充実させていく。そして、より多くの人々に親しまれる活動を併せて行うことで観光に貢献するという活動も既に見られております。そこで、文化資源の観覧など文化についての理解を深めることを目的とする観光を「文化観光」というふうに位置付けて、その推進を検討してはどうかという問題意識を持っております。1ページ目、下のところには、外国人旅行者が経験したことということで、美術館・博物館の訪問というのを挙げております。

また、1枚めくって2ページに行きますと、参考のデータを少し入れておきました。2ペー

ジの下半分に表を付しております、博物館はいろんな種類がございますけれども、左から右に行くにつれて、来館者の多い博物館の割合を示しています。美術館ですと、473館のデータのうち、20万人を超えているのは大体10%弱。歴史系ですと、1,000館ほどございますが、そのうち20万人超えるのが約3%。自然史系92館のうち、これも8.7%ということで、一定の割合の博物館が、来館者数20万あるいは30万、50万というところのオーダーで来館者を得ていらっしゃるところでございまして、こういったところを中心に少なからず外国人の方もいらっしゃるものというふうに推測しております。

一方、1枚めくって3ページですが、県立や政令市立の博物館、たくさんあるのですけれども、そのうち代表的な館として150館ほど調査をしております、そういう中で多言語に関して見てまいりますと、まず、左の方の表ですが、パンフレットは多言語であるというところは半分ほどございますが、解説板を多言語でやっているところはまだ少ない。また、来館者数という点で見えていきますと、右側の表の2段目ですけれども、154館のうち93館で外国人来館者数をカウントしているところですが、2,500万人のうち93万人が外国人ということでカウントしているところです。これは平均すると3%ですけれども、この中には、3割を超える外国人を入れているところもあれば、まだまだそうではないというところと、多様でございます。また、来館者の利便性という観点では、バリアフリーなど、様々な課題もあるところでございます。

4ページに行きまして、参考3として、政府におきまして今年前半に、観光ビジョン実現プログラムですとか、経済財政運営と改革の基本方針、まち・ひと・しごと創生基本方針におきましても、こうした観光との文脈の中で、日本文化の発信、あるいは文化施設を拠点とした文化資源の好循環創出といった観点の記載を政府としても掲げているところでございます。

1枚めくって5ページ、きょうは、よろしければ、ここの論点を御議論いただければどうかと思っております。5ページで1と2に分けております、まず、1ポツの文化観光に関する拠点としての機能を強化する取組として、どんなことがあろうかと。ここは抽象的に七つ書いています。その中でも、(1)は総論的なものとして認識しております、まず、文化施設が持っておりますコレクションやコンテンツの魅力を高めていく。それによって、国内外の幅広い来訪者に伝えていく施設であるということをそもそものミッションとして明確にするということが大事であろうと考えています。その上で、(2)(3)に関しましては、展示や解説の工夫をする、また、様々な鑑賞や体験の機会を提供する、こういったこ

とが博物館固有の事柄としてあろうかと思っています。併せまして、(4)からは、個別の文化施設単独ではなかなか対応し切れないところ。例えば(4)では、来訪者のアクセス向上。博物館・美術館は郊外にある場合も少なくありませんので、交通事業者と連携して、便を増やしていく、あるいは共通乗車券といったこともあるのではないかと。また、(5)では、国際的な発信という観点から、JNTOや地域の観光関係事業者との連携が大事ではないかと。(6)は、博物館や美術館を点で考えるだけでなく、周辺地域との連携が大事ではないかと。ここでは、例として、博物館の外に置きますオブジェの設置による魅力の向上、あるいは商店街との連携というのを挙げています。こうした、(4)(5)(6)のような面的な取組が大事ではないかと。その上で、(7)といたしまして、持続可能性ということも経済的な観点から大事ではないかということで、挙げています。こうしたことを踏まえていきながら、2ポツにおきまして、こうした文化観光に関する拠点を形成し、推進していくという観点から、予算・税制・国による特別な措置ということを考えてはどうかと考えております。

以下、6ページからは少し参考事例を挙げておりますので、ここはざっと御覧いただければと思います。

6ページと7ページでは先ほどありました文化審議会博物館部会におけます議論を挙げておりますが、このうち、6ページの方では、下の方に線を引きました。博物館に關します所管が、従来は教育委員会だけだったのですけれども、今年6月から首長も所管可能となっております。また、もう1枚めぐりまして7ページに行きますと、4ポツ、博物館の活動基盤の整備ということで、博物館を中核とした文化クラスター形成事業の推進。さらに、文化振興、地域の活性化、経済活性化の観点から、意欲ある博物館に対して、予算・税制・関係省庁との連携施策を通じた支援ということを挙げております。ですので、博物館部会におきましては、博物館に関するいろんなことを議論することとしていますが、この中でもこの検討会議と関わりあるところを今御紹介いたしました。

8ページからは、国立の事例として東博がまとめている改革プランですけれども、1枚めぐって9ページですが、東京国立博物館におきまして、この1年弱の間、多言語化にかなり意欲的に取り組んでいるところがございます。多言語を前提として、分かりやすい解説を付していくということに取り組んでおります。

一方、10ページにおきましては、文化庁では2年前から博物館クラスター形成支援事業というのをやっていまして、これは、博物館や美術館が、地域のまちづくりや観光、あるいは

は様々な地域の社会問題の解決に貢献していこうという取組を応援しようとしているものでございまして、10ページでは、群馬県の取組、都内の取組、横浜の取組、11ページに行きますと、伊豆高原、奈良、倉敷、北九州の事例を挙げています。こうした取組の中で、去年、今年に始まったフェーズでございますけれども、例えば、11ページ左下にあります倉敷の事例では、大原美術館を中核とした、倉敷美観地区との関わりという観点での事業が始まっているとか、また、奈良では、奈良国立博物館が、春日大社、東大寺などと一緒に取組をしていこうということで、博物館と社寺の連携という取組などを挙げているところでございます。こうした取組が始まっているところでございまして、12ページではそうした文化庁の予算のメニューを付しておきまして、この中で、博物館クラスター事業、来年度は14.9億円の予算要求を現在行っているところでございます。

こうした博物館に関する取組もあれば、13ページは、今度は日本遺産という文脈でございます。14ページで日本遺産のリストを、15ページでそれを表にしたものを掲げているところでございますけれども、様々な日本の文化をストーリーとして認定していくという取組を日本遺産という文脈で初めているところでございます。

ここまでが国立の博物館や文化庁における博物館や日本遺産の取組でございますけれども、個別に既にいろいろな事例がございます。16ページから3枚かけて、香川県の直島におきます事例を入れております。御承知の方も多いと思っておりますけれども、ベネッセホールディングスと福武財団、地元直島町がアート活動の展開に取り組んでおきまして、16ページではそれを俯瞰したもの、17ページでは観光客を引き付ける様々な取組を挙げています。18ページでは、香川県や瀬戸内海の周辺地域、そして直島ということで、様々な行政や様々なセクターとの連携の中で様々な取組が進んでいるという事例でございます。こうした先進事例が一つ。

それから、19ページからは石川県金沢市の21世紀美術館の事例でございます。こちら、平成16年に開館し、現在、入館者が258万人ということで、ミュージアムとまちの共生という取組が様々な展開されております。20ページでは、地域住民や観光客を引き付ける取組として、魅力的な文化資源、様々なアート展覧会、それから、子どもたちとの連携、市民との参加交流を挙げております。21ページでは、これを更に面的に広げていこうという事例を挙げております。

こうした先進的な取組もありつつ、一方で、22ページ、こちらは鳥取県の事例でございますけれども、これから更に頑張っていこうという事例として、一つ、青山剛昌ふるさと

館の事例を挙げております。こちらは、もともと地元におきまして漫画を活用した地域活性化というのを掲げておりまして、こちらは「名探偵コナン」の原作者の出身地ということで、そういったコンテンツの連携を取り組んでおります。1年間で16万人の来館が既にあり、外国人もそのうち1割を超えているというところでございます。23ページでは、原画などを使った文化資源の活用、それを見せていく工夫、また、まちづくりへの取組といったことがございます。23ページ右下に「今後の方向性」と書いていますけれども、県全体・町全体での取組を更に進めていく。その際には、博物館としての魅力の向上自体もありますけれども、併せて、空港と博物館を結ぶ連絡バス、あるいは駅と博物館を結ぶバスというのも拡充しましたが、一層の拡充を広げていくことで利便性を高めていくという課題を伺っております。24ページは、まちづくりの一環ということでこの施設を活用しているところでございまして、こうした様々な先進的な事例を更に磨きをかけていこうという取組が多々見られているところでございまして、こうした事例を参照しながら、国におきましての文化観光という文脈での支援策を検討いただければと思っております。

私から、以上でございます。

【島谷座長】 ありがとうございました。

榎本課長から説明していただいたら、ぴったりリンネさんが登場いたしました。

【リンネ氏】 遅れまして、すみません。

【島谷座長】 一息入れていただいて、リンネさんに発表をしていただきたいと思います。ですが、リンネさんについて御紹介いたしますけど、もともと日本の京都国立博物館で働いていただいております、それからサンフランシスコのアジア美術館のキュレーターをしばらくやられて、その後また京都に戻ってきて、今、多言語化対応の職員として非常に活発に発言・行動をしていただいております。九博の事情であるとか、そういったのを見ていただきながら、九博というのは私が勤めているところですが、アドバイスを頂いたりしております。そうした内容を紹介いただければと思いますが、いろんな委員の方にも御意見を頂きたいと思っておりますので、リンネさんには、非常に難しいと思っておりますが、10分程度でお願いしたいと思います。

よろしくお願いいいたします。

【リンネ氏】 よろしくお願いいいたします。京都国立博物館のリンネと申します。10分と言われていまして、これは2時間でも話せる話題ですので大急ぎでお話しさせていただきますが、とりあえず、お断りなんですけど、私、実は7月から別の形で雇っていただいて

おりまして、多言語の担当ではなくなりました。ただし、2014年の春から今年の5月までは英語の担当でした。その試行錯誤の展開ということで、今までどうやって英語を京博で増やしてきたという歴史を資料に沿って簡単に説明したいと思います。

資料1-1は、従来の京博の題箋で、日本語の解説がありまして、英語は、我々が言うキャプション情報だけ、基本情報のみということで、個別の解説がないものでして、御参考まで、どういう作品かという、次のページの資料1-2の国宝の有名な中国絵画です。

その後は、展示室の中に何とか個別の英語の解説できないかということでお願いしたのですが、新しい館だったので紙が多くなると見た目がよくないということで、ラミネートしたA3のプラカードを作って、必要な人が持って行けるようにということで、これはA4にされているのですが、資料2の2ページがありますが、こういったものが表裏3枚セットで今の展示が持って歩ける。各部屋で一つぐらいしか紹介できないのですが、無いよりもましということで。だけど、それを作るのが実は大変で、独りで全部やらないといけなくて、1か月ごとぐらいで展示替えがありますので、これは作業的にもなかなか大変だし、しかも展示室の中に置けるところがないので、ロビーのインフォメーションデスクの後ろに、聞きに行く人だけがもらえるという、なかなか見付からないような形でありましたので、これを変えて、実際、私の考えでは、展示室で作品の横にあったほうがいいと思います。一番、分かりやすい。それで、その後に、1-1に加えて、資料3のような、ちょっとしっかりした解説を各展示室の3点ぐらいに置かせていただけることになった。これは割と長いのですが、非常に情報があって、裏面にある日本語の解説の情報が全てある上に、外国人向けに分かるような情報が加えてあるというようなもので、2年間、こういう形で続けておりました。

2017年に100%の作品を英語だけではなくて多言語の解説をすると上から言われまして、資料4-1という、今の形になってまいりました。これは同じ作品ですけど、英語と中国語と韓国語。そのときに、私だけじゃなしに、韓国語、中国語の専門スタッフを雇って、やることになりました。英語とか中国語、多言語のものになるので、その隣に置くのは資料4-2の日本語です。英語がそこから無くなったということですね。日本語は以前と同じく縦書きで、多言語は横書きということで、これを作るに当たっても、フォントの大きさとか、フォントの読みやすさとか、かなり時間を掛けて。日本語の解説は、InDesignという、限られた人しか使えない、ちょっと高いソフトで前と同じように作られているのですが、一方、英語、中国語、韓国語は、このテンプレートをWordに作りました。ですので、自分

の机でも、打って、調整して、入るように、いろいろ工夫できるということにしました。今のはこういう形になります。実は、長さが非常に短くなった。以前は100から150ワードという非常に充実したものだったのに、これは短い。最初、私は非常に不満で、今までためたものはどうなる、もったいないなと思っていたのですが、でも、逆に、今100%で、短いものであると早く読めるので、お客さんにとっては、たくさん見るのに読みやすい。京博はそんなに大きくないので、全部読んでもそんなにおなかいっぱいにならないというような程度ですので、これは大体60ワードぐらいですけど、理想的には多分、75ワード以内でしたら、短い解説になると思います。

このぐらいで多分10分話させていただいたと思うので、御参考まで、当館のスタッフが以前に発表した資料を添付いたしました。多言語というのはいろんなレベルで専門的なスタッフが必要で、もちろん、実際にそれぞれの言語で書く人、翻訳する人が必要ですけど、それ以外に、非常に大量な作品が非常に頻繁に展示替えされていて、ミスを非常に起こしやすいのです。なので、そこでコーディネーション、この太田千晴さんは非常勤なのですが、医療機器の会社で30か国語の医療マニュアルの翻訳のコーディネーターをした方で、これを読まれば分かるように、非常にきちんとしたこと。あと、もう1人、コーディネーターしている人は、中国語もできるとか。

それで、課題を最後に書いたのですが、校正・校閲の問題ですけど、日本語でしたら、多分、担当者が書いて、ちょっと誤字があったりとか、ミスがあったりしたら、どこかで気付かれて直されるのですが、外国語の場合は、できれば二、三人が読んで方がいいですね、理想的には。英語はちょっとましなのですが、それでも文法のミスとかだったら気付かれないので。あとは、量の問題で、学芸員でしたら一つの展示室の担当を普通にやるのだけど、多言語の人は100%、毎回、特別展と平常展、全部やっているの、サステナブルかどうか分かりません。というところがあります、余り多かったら。あと、理想的には、コンテンツはその言語のオーディエンスに合わせて書いた方がいいのです。中国の教育を受けた人と、アメリカで教育を受けた人と、ヨーロッパで教育を受けた人とかは、多分、立場が違いますので、補足の説明がそれぞれ違うので、ただ翻訳ではなくて、読んで、そのオーディエンスにワード数内で書くというのが理想だと思いますので、いいメンバーを引っ張ること。

調整役の話はしましたので、とりあえず以上で終わらせていただきます。10分になりましたか。

【島谷座長】 まだ9分ぐらいです。

【リンネ氏】 わぁ。生まれて初めてかもしれません。

【島谷座長】 すごく緊張していた感じですが、いつもより。

【リンネ氏】 すみません。

【島谷座長】 どうもありがとうございました。

京都国立博物館の例をマリサ・リンネさんから紹介していただきましたが、これは、そういう多言語の人がいるという、ある意味、ちょっと恵まれた環境であるということを念頭に置いて、討議してもらいたいと思います。多言語化ができるようになったのも言ってみれば官邸でアトキンソンさんあたりが強く言っていたいただいたおかげで、そういうお金を付けようと。それで、東京国立博物館を中心に、多言語化の職員が付いてきたという。当初は、東博にたくさん付けて、ほかはそれを調整すればいいじゃないかというような話もあったのですが、当時、私は東京にいたものですから、各館に付かないと話にならないということを強く言って、やっております。

今、マリサさんの話の中で、一般の人にはちょっと難しいかも知れませんが、絵画は、1か月に1回、展示替えをしています。それ以外に、2か月に1回のもの、3か月に1回のもの、様々なものがあるという前提で、そのローテーションを全部すれば、資料がたまり、時代も変わるから少し変えなきゃいけないのですが、安定した供給ができるようになるのですが、それまで回転するのに相当時間が掛かるということです。

ちなみに、東京国立博物館のコレクションの数は、11万件で90万点ぐらいあります。京都が8,000件、奈良が2,000件、九州が1,200件ぐらいです。それぐらい体力的に違うので、東京は人がもっと必要であるということは念頭に置きながら、今は各4館がばらばらの状態で蓄積している状況にあるわけですが、それが共有できるような形にどうしたらできるかというのを多言語化の人同士が話をしているということで、国立文化財機構に関しては、比較的共有ができながら、進行しております。これも卵が先か鶏が先かの論点で、外国から来る人が少ないのでそれをやる必要がないのか、それがないから人が来ないのかということなのですが、現実的にやってみると多くの方が見てくださっておられますので、やる必要は物すごくあるというふうに、現場としては考えております。

前提としてそういう話をしておいた上で、多言語化については一家言も二家言もお持ちのアトキンソンさんから最初に御意見頂いた方がいいかなあとしますので、よろしくお願ひします。

【アトキンソン委員】 海外においては博物館・美術館というのは観光資源の中で上位に入るのが普通で、さっきおっしゃったように、私としては官邸の会議の中で、特に東京の観光資源の中で東京国立博物館がトップ10に入らないことはあり得ない話で、たしか当時は根津美術館と江戸博物館とサムライミュージアムが東博より上に来ていた。個人でやっているところが国立の博物館より上に来るということはあり得ないので、東京国立博物館のポテンシャルを充実させていくべきだという考え方で発言をさせていただきましたけれども、私の友人とか、日本に来る人たちは、イギリスであればBritish Museum（大英博物館）だとか、ここに出ているルーブルだとか、東京に来れば当たり前のように国立博物館に行くという話だったのですが、残念ながら、素晴らしい施設であって、素晴らしいものを持っているにもかかわらず、言ってみれば台無しにされてしまっているというのが、私の問題視だったのです。

これは文化財と同じだと思いますけれども、保存して守っているのであれば、その使命はそこでおしまい、それで完成という考え方が非常に多かったのですが、昔はどうだったかわかりませんが、今現在においては、日本の文化・歴史を伝えていくことの重要性というのは次第に増していると思いますが、国内でも同じように日本の文化・歴史との距離感というのはどんどん開いているところなので、海外のためにある解説の話だけではなくて、きちんとした形で、国内のためにそれを、丁寧に分かりやすく、幅広く、多面的に説明をするべきもので、保存と活用を両立させるべきじゃないかと思うだけではなくて、私としては、活用していかなければ保存することすらできなくなる時代なので、多くのところで言われるように、保存だけして、人は来ない方がいい、来なくてもいいという考え方というのは、極めて危険な考え方になっていると思います。文化財もそうですけれども、守り過ぎといますか、守る気持ちが強くなり過ぎていることによって、結果としては破壊してしまう危険性も伴っている世の中が変わってきたので、それを理解した上で、特に国立博物館・美術館の場合は、税金を出してもらって保存・保管している美術品などを、親しみやすいことを大前提にして、来てもらう人に丁寧にできるだけ多く説明をする必要があるのではないかと思います。特に海外からすると、日本の歴史が分からない、文化の流れが分からない、背景が分からないから、できるだけ多くそういうような情報をインプットして行って、勉強してもらい、楽しんでもらうことが大前提じゃないかと思います。

そういう意味では、私としては忘れられないのは、大徳川展の重要文化財の彫漆のお盆の解説のところに、ただ単に「彫漆盆」と書いてあった。極めてもったいない話で、茶入

(ちゃいれ)の隣に「茶入」と書いてあって、そこを通る日本人は、「サニユウ」とは何だろうということを書いて、字も読めない。それだとやはり、博物館・美術館は、保管する役割は果たしているかもしれませんが、伝えていく、勉強してもらい、学べる場所、美術を楽しむ場所の役割は、今まで余り重視してこなかった気がします。

私としては、最後ですけど、楽しいということはすごく重要な話で、某国立博物館のスタッフに「庶民の下らない質問に答えるつもりはない」ということを実際に言われたことがあるのですが、そういうことではなくて、いろんな展示の仕方の工夫もありますし、リンネさんがおっしゃるような、書き方は、別に下らないものにする必要はないのですけれども、受け入れやすい、楽しい、面白い、そういう工夫も必要であると同時に、解説、座る場所、また、人間が来ているわけなので、飲食、この3点セットというのは一番、日本の博物館・美術館に欠けているところじゃないかと思います。そういうことを充実させていけば、せっかくある施設が、雨が降れば絶対にそこに行こうとか、暇があれば、今月はどういうふうになっているのかというのを毎月のようにレポートして行きたい気持ちになるような、そういう場所が変わっていけば何よりだなと思います。イギリスの大英博物館というのは、昔は誰も行かないところだったのに、今はBritish Museum Pizzaまでできているらしいのですけど、ある意味で飲食目当てかもしれませんが、ついでに見てもらえるものですので、そういういろんな入り口があって、ふだんは行かない人でも来てもらえるような施設が変わっていけば、交流の場所として素晴らしい貢献ができるのではないかと思います。

今日は山野さんも来ていますのであれですけど、キャッシュレスだとか、ネット予約ができるとか、そういうこともあることによって、ストレスのないように、すばらしい時間を過ごすことができるということを今の博物館・美術館の使命にすれば、働いている人たちも更に幸せになるのではないのかなと、私は思います。

以上です。

【島谷座長】 ありがとうございます。全部まとめていただいたような感じで。

リンネさんには多言語化で話をしてもらったのですけど、アトキンソンさんには、博物館行政運営について、いろいろ貴重な話をさせていただきました。聞き捨てならない某国博の意見もありましたけれども、そういうことを言う職員って頭に浮かぶような気もするのですが、忙し過ぎていろんなことに手が回らないというところから、そういうとんでもない発言になるのだらうと思うのです。したがって、予算があるだけでも駄目だし、文化庁

さんがいろんな補助金を出してくださっていても、国立博物館、それを申請するだけの体力が無いところが多いような感じがしますので、それを申請しやすくするためにはどうしたらいいかという、人的なことも考えていかなきゃいけないかなあというふうに、強く思いました。

いろんな話の中で文化資源をどう使っていくかということがございましたけれども、守るだけではいけないというのは当たり前のことで、日本の明治になる以前の文化財の保存ということを考えた場合は、お殿様であるとか公家さんだけが見ていけばよかったわけですが、欧米の美術館・博物館を参考にしながら、日本でもミュージアムというのが出きたわけがございます。正式な国立の時代は極端に言うとも見せてやるというふうな姿勢がなかったわけではなかったかと思うのですが、文化財機構の前の国立博物館は、独立行政法人になってから意識は随分変わってきまして、それをどう活用していくかという形に大きく変わってきております。だから、そのところをもう少し推進するためにはどうしたらいいかということを考えなければいけない。

今、アトキンソンさんが言った「茶入 (ちゃいれ)」というのはすごく心に響くことではありますが、マリサさんの長い英文の裏のページにあるのですが、ページ数を打ってないのですが、「白糸威棲取鑑 (しろいとおどしつまとりあぶみ)」と書いてあるのを、この中にいる人で何人が全部読めるかなあというふうに思いました。多分、美術関係者の人は当たり前のように読めるのですが、それ以外の日本人はほとんど読めないと思いますね。そういうふうに、専門ばかという人間が多くて、自分たちには当たり前だけれども、ほかの人には分からない用語を平気で使うという。その用語の説明をしていると解説が書けないから、書かないのだと。解説を書かないのだったら、用語解説は別のパネルを用意するなり、そういう親切さがなければできないということもあろうかと思えます。

ちなみにですが、皆さん方、どれだけ認識あるか分かりませんが、国立4館の中で時代別の陳列をしているのは東博と九州だけです。京都と奈良は分野別の展示です。だから、同じ時代が行ったり来たりするのです。それは駄目だということで東京国立博物館がリニューアルをして時代別の陳列にして、時代別の陳列をした場合に、我々、ヨーロッパへ行って、ヨーロッパの年代が頭にぼんとは入っているわけではないので、外国の方に例えば南北朝時代と言っても分からないだろうということから、時代陳列にテーマ設定をしたのですね。例えば、古い時代だったら、仏教の渡来だとか、仏教の交流だとか、公家の世界だとか、そういうことで時代とテーマを与えることによって、世紀はそこに当然書くわけです。

けれども、何の文化が中心だったかが分かるようにしたという、2段階のリニューアルをしているのが今の東京国立博物館でして、それでいいかどうかというのも、また検討しつつあるようです。九州も時代展示が根幹なのですが、なかなか時代展示は難しいということ、京都と奈良はある意味アートミュージアム的なヒストリーミュージアムであるというので、ちょっと性格が違うところがあるので、そういった博物館の特性を生かしながら、それを観光にどうつなげていくかという。京都、奈良は、観光に行っているわけですから、京博、奈良博に行くより、お寺や神社に行った方が絶対いいということがあるので、逆にそれは利点でありマイナス点でもあるというところがあるかと思いますが、ある意味、インフォメーションセンター的なもので示していくとか、いろんな考え方があろうかと思えます。

そういった意味で、文化資源をどう活用するかというので、勝手に振りますけど、文化資源の専門の小林先生。

【小林委員】 基本は、アトキンソンさんがおっしゃったことと同じことを、私もずっと思ってきました。というのは、「文化資源の」と言われてしまうと困るのですが、私、文化政策とか文化行政の方を専門にしていますから、奈良県の文化財保護の政策などにも関わっている中で、すごく心配に思ったのは、このまま保存・保護のための予算を要求していったとしても、県民等に理解されないと感じました。というのは、文化財はいいものかどうか価値があるものかどうかということが税金を払っている人たちに理解されていないというような状況があって、彼らにいいと思ってもらわないと、これからもっと文化財を保存していきましょう、保護していきましょうという話にならないなというのは、思っていました。実は自分自身は、文化財とか博物館の専門家ではなくて、こういう仕事をし出してから博物館とか文化財に関心を持って見るようになった方であって、博物館の方が、学芸員の方も含めて、何が何でも保存だというふうに言っていることに大変驚いたというのが正直なところでした。むしろ、見せることの方が壊れるのだというような状況がこのことによって改善されていく方向性に行くのだったらすごくいいと思いますし、まず、「日本の」という言い方をしちゃっていいかわかりませんが、日本はそれなりに見せてしかるべきものをたくさん持っていると思いますから、それを安全に見せる方法みたいなことも含めて、今後検討していければいいのではないかな。

というのは、多言語の問題もすごく大事ですし、大勢のいろんな方々がいらっしゃるといふことになると、場合によっては様々なしつらえみみたいなものも必要になってくるかも

しれないし、保存していくときに、安全に見せるための装置と言ったら変ですけど、みたいなものも必要になってくるような気もしていて、そういう点からすると、文化庁だけではできないところで、連携して、今回、法律を作るという話になるのであれば、それは正に望ましい状況ではないかなあというふうに考えています。

すみません、意見がまとまらない中、まさか最初に振られるとは思わなかったので。ごめんなさい。

【島谷座長】 途端に振って、すみませんでした。

アトキンソンさんも小林先生もおっしゃっていただいたのは、保存だけでは活用につながらない。両方あって初めて、国民の理解が得られると。リンネさんからサステナブルかどうかというのが非常に問題だというような話もありましたけれども、サステナブルにするためにも、そのものが必要で、伝えていかなきゃいけないものだとすることを理解してもらわなければならないわけですね。それが多言語化であり、保存の在り方だと思うのです。

今、文化庁の方で、文化財に対する一つの目安、1年間にどれぐらい展示してもいいかという、その目安の根拠がどういうものであるかということをもう少し検討していただいて、今の状況でいいのか、もっと厳しくしなきゃいけないのか。例えば、状態がいいものだったら、3か月、4か月、海外でも出していいのか。その判断が、曖昧ではなくて、明確にする根拠というのを出していくということも必要かなあと思います。本当に大切かどうか分からなくなれば、分からなくなってしまうわけですね。だから、ふだん、これが必要ですよというのは、金銭的価値ではなくて、歴史的な価値、日本人のアイデンティティーを考えるとこの物は絶対必要なのですよということを見せていかないと分からないというのは絶対あると思いますので、私だけが話をしてもしょうがないので、今、文化財の保存と活用という形でいきましたけれども、せっかく山野さんがお見えになっていますので、それを、理解を促進するために、どういうふうに観光・広報につなげていけばいいかというような御意見がありましたら、お願いいたします。

【山野委員】 山野です。よろしく申し上げます。

観光という観点も交えて、あえてインフラの話をしていただきたいのですが、先ほどの博物館の展示物、コンテンツの充実というのは前提条件だと思うのですが、コンテンツの充実を伝えるために前提としなければいけないのは、先ほどの展示の説明という観点での翻訳ですよ。そこにあえて付随してお伝えさせていただくと、もう二つ欲しい

なあと思っているのは、一つはオーディオガイドですね。多言語対応のオーディオガイド。そもそも展示の説明も翻訳できてない時点でオーディオガイドは多分ないと思うのですが、展示を回っていくときに、音声での説明というのは、海外はどこも、美術館・博物館を含めてあるものですので、そもそも、コンテンツの充実を伝える上でのオーディオガイドというのはインフラとして数えてもいいのではないかと、あとはガイドツアーですね。各国必ず、多言語対応された学芸員の方あるいはツアー専門の方々がいて、単価アップという観点でも、臨場感あふれる御説明をしていただける方がいらっしゃいますので、ガイドツアーみたいなのところも一つ、インフラと数えてもいいんじゃないかなというふうに思っています。

あともう一つは、先ほど観光という観点でお伝えさせていただいたように、電子チケットですね。ここに挙がっている、ルーブル美術館も、メトロポリタン美術館も、バチカン美術館も、全部、インターネットで事前にチケットを買えますというのが前提で、インターネットで事前にチケットを買えないと各国のOTA並びに観光の際に情報収集するメディアに情報が流通しないということになりますので、大々的にマーケティングしましょう、プロモーションしましょうという話ではなくて、まず前提条件に、タウンページに名前が載ってないということと全く同義なので、電子チケットみたいなのところもインフラとして掲げていいんじゃないかと。あとは、それを使う上でのWi-Fiですね。

私がお伝えしたかったのは、インフラという観点でコンテンツの充実が前提で、それを伝えるための翻訳、オーディオガイド、ガイドツアーみたいなのところと、電子チケット、Wi-Fiみたいなのところの五つはインフラの中に数えていただいた上で、整備をしていく、推進していくということをやっていく必要があるんじゃないかというふうに思っています。

例として挙げるのですが、日本ってなぜか、インターネットとか、テクノロジーとかって聞くと、産業がまだ新しいからなのか、ドメスティックで育ってきた日本のカルチャーの中で新しいものってなかなか取り入れづらいからなのか、よく分かりませんが、例えば、こういう会合に出ている、多分、一番若く、髪が長いみたいな人は、あいつヤバイみたいな感じで思われがちなカルチャーがありますよね。結構、インターネットって近くて、インターネットって聞くと、危険とか、怖いとか、よく分からないみたいな印象で、思考停止しちゃうというのが結構地域であります。

お名前は挙げないのですが、100万人を超える来場者数の某大型美術館の責任者の方とお話しして、電子チケットを何でやらないのですかと。現場の方々はやりたいと。オペ

レーションも効率化するし、グローバルマーケットの中で情報をアウトプットできるというのは非常に重要だということなのですが、最終決裁者の方とお話ししたときに、やらないということになったのですが、何でやらないのですかと聞いたら、危険と言ったのですね。インターネットで電子チケットを買っている人、危険って、何かイメージわかります？危険って何だみたいな。危険って何ですかと聞くと、危険なんだよと言うのです。要するに思考停止ということなのですが、インターネットー電子ー危険みたいにシナプスが多分つながっているのだと思うのですが、それって非常に不毛で、利便性、便益、あるいは、観光のマーケットは、国内需要のみならず、海外に変わっている中で、今までのやり方は既に対応ができないということに目を向けなければいけないのですが、それができていないというところが非常に課題ですという事例があったりするぐらい、電子チケットの整備が日本の中で全然進んでないという現状があります。

そもそも、マチュピチュだって、コロッセオだって、サグラダファミリアだって、電子チケットを使っているのですよという話なんですけど、なぜか観光先進国になりたい日本はどこも全然使ってないという。名所、旧跡、寺社仏閣、美術館、博物館は電子チケットの導入が全然進んでないという現状ですから、ここはグローバルスタンダードにちゃんと合わせていくためにも、先ほど言ったように、昔、電話をするのにタウンページに載ってないとそもそも住所自体が存在してないと思われたと同じように、電子チケットが活用できてないと、グローバルのオンライン・トラベル・エージェンシー並びにインフォメーションメディアの中に情報が載らないというのと等しいということなので、ここはしっかりとインフラとして考えていく必要があるんじゃないかというふうに思っていますというのが、観光観点も含む、私の意見です。

あともう一つ、加えて、観光化という観点でいくと、地域との関わりというのが非常に重要だなあというふうに思っています。つい先日、大原美術館という岡山の倉敷の美術館に行ってきたのですが、あそこは倉敷紡績（現クラレ）の創業の地で、その地域に民間として徹底的に投資をして、江戸時代から残る景観だったり、明治の重要建築物だったりとか、あとは大原美術館という非常にキュレーション能力の高いコンテンツがそろっている場所があるのですが、そこは、倉敷という場所全体でいかに、ストーリーとして、観光という観点で全てのコンテンツが表現をしていくかということができているのですね。その中心にあるのは大原美術館で、そこが彼らのアイデンティティーで、昔ながらに、美術、芸術、歴史というものに目を向けて、文化を育んできたというプライドがあると。そ

こから派生して、面で観光政策をしっかりと実施しているというところが特徴的だなあというふうに思いました。なので、先ほどの地域住民の理解が必要ということなのですが、地域住民の方にいかに自分の地域の歴史あるいは文化を誇りにしていただくかというところができるかということだと思えるのです。そういう意味では、よく、必要ですよ、誇りです、誇りにしなさいって上から言われると、人間ってあまのじゃくなので嫌だと思っちゃうんですけど、すごくないですかって聞くと、すごいかもしれないっていうふうになっていくと。例えば、長岡の花火大会とかって、花火が鳴って、子どもの声がうるさいみたいなことを言う人はあまりいないじゃないですか。あれは長岡の誇りとして存在しているのです。

先ほどもお話があったのですが、博物館・美術館って地域の誇りなのだとということまでしっかりと、落とし込むという言い方が正しいのか分からないのですが、理解促進をしていけると、地域全体の取組として観光のコンテンツが広がっていくんじゃないかと、こういうふうに思っていて、なので、先ほどの、理解が必要、理解がないと税金が獲得しづらいよねというところからすると、地域に対しての理解、逆に情報の開示みたいなところからしていった上で、地域として博物館・美術館を捉えて観光にしていくという考え方も非常に重要なんじゃないかなあ。今までは勉強機関としての在り方だったと思うのですが、勉強と生活は遠かったりするんで、観光・レジャー・文化としての発信拠点なんだという捉え方で地域に根差していくという考え方が結構これから重要になってくるんじゃないかなあというふうに思います。

後半は少しプレストベースですが、前半は、インフラというところをどこまで捉えるかという観点で、翻訳は当然なのですが、オーディオガイド、ガイドツアー、電子チケット、Wi-Fi、ここはインフラとしても前提条件になればいけないものなのだという認識をまず作っていくのが重要だというふうに思っています。

すみません、長くなりました。

【島谷座長】 ありがとうございます。

前提条件として作っていくことができる体力が有るところ、無いところ、いろいろあるので、それにどういうふうにしていかなきゃいけないかなあということかと思うのです。

【山野委員】 例えば、電子チケットで体力とかは要らないのですよ、別に。

【島谷座長】 いや、設定するまでの人的なことです。今、それを論議している時間はないので。私、否定的なことを言っているわけではなくて、できないところの立場の人は、

どうしていったらいいかなあとということだと思いますよ。一番根幹にあるのは、アトキンソンさんが言った、楽しめるということが博物館・美術館に求められていると思うのですよ。これが無ければ、行って楽しかった、また来ようとは思わないです。便利なだけのところに必要のない人は行かないですから、楽しかったり、体験したり、文化と観光を結び付けなきゃいけない。必要としないところにそれを無理やり押し付けても駄目だと思います。山野さんが言っているのは全部あった方が絶対いいという前提で私は申し上げているのですけれども。

大原美術館のところであっても、地域が一体となって観光に力を入れているからそれができるので、その辺は商店とか何かほとんど担っているんで、大原美術館から受けている益が高いのですよ。例えば、私がいる九州国立博物館で言うと、太宰府天満宮は1000年前からあるから、周りに住んでいる人たちはみんな後から来た人だから、天満宮に文句言えないのです。天満宮は、年末年始とか、時期によっては、あの辺、車を出したら、1日、車は帰ってこられないのですよ。大変なのです。たばこも車で買いに行けないような状況にあるけど、誰も天満宮に文句を言わない。一方、九州国立博物館はたまに、「阿修羅」とか何かで、今も「三国志」で土日は混んでいて、駐車場へ入るのに2時間掛かるとかっていうクレームを付けられるのですけど、そんなことって年に何日もないのですが、そういうクレームはいっぱい来るのですよ。だから、地域住民と密接に、何かメリット、地域住民が楽しめるところ、そういった環境を提示してあげないと、地域住民で商売をやられてない方にとっては、極端に言うと、博物館・美術館、観光地がそこにあるのは邪魔なのです。例えば、実名を出して悪いけど、川崎大師へお参りに行くときに、普通のときは人がいないのですけど、正月のときには物すごい人がぞろぞろ家の前を歩くわけですね。のぞかれるわけです。みんな不快なわけです。でも、川崎大師は昔からあるから文句を言わずに、文句のある人は引っ越してという形になります。そのような形で、地域住民と一体となってそれを盛り上げるためには、地域住民がそこを楽しめる環境になければいけないというのは強く感じます。山野さんがおっしゃるように、5点セットが全部そろってれば物すごく至便でいいと思うのですけど、それをするためのお金と時間と体力、時間の部分かな？それをどうすれば捻出できるかということを丁寧にこれから説明して行って、実現に向けていければいいかなあと、私は思っておりますので。

順番というのもあれですけど、まだ発言されてない方で。太下さん。

【太下委員】 今日文化と観光についての大きなお話もしたいのですが、せっかくり

ンネさんにお越しいただいて多言語化というテーマもお話しいただいたので、ここからちょっとお話しさせていただいて、後で時間があれば、是非、大きな話もしたいと思います。

実は、私は文化財保護法改正のときのワーキングの副座長というのも仰せつかっており、保護と活用の両立というところで、今後是非、私も何らかの貢献をしていきたいと思っていますのですが、活用にあたって、説明して理解していただくということが第一歩だと思うのです。非常に大事なことだと思います。多言語化は、特に訪日外国人が増えていくという背景の中で考えると、同じ文化を共有しない方々に対して、ある特定の文化、特に日本とか、又はこの例で言うと中国の文化を理解してもらおうという、そういう作業が必要になってくるというふうに思います。御案内のとおり、文明というのは普遍的なものですが、文化というのは個別多様なものなので、多分、文化を共有していない人に伝えるというのは、実はかなり難しいことだと思うのですよ。

その実例が、きょうリンネさんが御説明された資料だと思うのですが、「秋景冬景山水図」、これは中国のものですが、日本語の説明が2回ぐらいありますね。最初の方の資料1-1と、資料4-2と、2回ある。それに対して、多言語の説明が資料1-1の最初の方にあって、中国語と韓国語は分かりませんが、英語と日本語のテキストを読み比べると、英語の方がはるかに、日本人にとっても分かりやすい。このことが何を意味しているのかということですが、さっきアトキンソンさんもおっしゃっていましたが、実は日本人自身も、日本とか、日本に非常に大きな影響を与えた韓国や中国の文化というものをきちんと理解していないという状況があるということですね。さらにポジティブなことを言うと、この英語の文章を日本語訳すれば、多分、特に子どもたち向けの教育素材としては非常に使いやすいですね。まず、入り口が違うじゃないですか。要するに、絵の中に描かれている、学者というか、高士というか、それなりに徳のある方の視点からこの絵を解説しようというふうに紐といている。これは絵との関係性をまず作ろうという試みですよ。こういうのは、そもそも説明にあたってのコンセプトが違っているということを多くの関係者は認識した方がいいと思います。

その上で、先ほども言ったとおり、文化を共有しない人いかにこの文化というものを伝えるのかという観点からすると、実は子どもたちというのは、子どもの状態では我々と文化を共有しないのです。だから、教育というものがあるわけなので。彼らに伝えるには、一度、多言語にした上で、それを日本語訳した方が早いのではないかな。要するに、多言語化というのは、さっきもちょっと出ましたが、外国人のためではないです。我々

日本人が、日本の文化、東洋の文化を理解するためのツールになり得ると思うのですね。是非、そういう観点でやっていくのがいいと考えます。

あと、先ほど多言語化に当たってのミスの問題というのをリンネさんは指摘されましたね。ミスの発見が従来は難しいのだと。これに対しては、一つのアイデアとして、ゲーミフィケーションで対応できないかなと考えています。要するに、ミスの発見をゲームにするのです。発見した人に対しては、ミュージアムグッズをプレゼントする。それを全日本的にやっていくということです。要するに、ミスの発見自体を一つのアトラクションにしてしまうということです。そのぐらいでやらないと、多分、ミスってなかなか見付からないと思います。一種のウィキペディア方式に若干の景品が付くという。多分、世界中でそういうことをやっている国はないですけども、ゲーム感覚で日本的な文化でもあるので、それ自体も取り込んでやっていったらいいのかなと思うのですね。

後で時間があったら文化と観光の話もしますけれども、続けちゃった方がいいですか。

【島谷座長】 いや、少しずつ。ありがとうございます。

非常に示唆に富んだ発言だったと思います。資料4-2のような形になったということでマリサさんがこれを出してくれたのですが、これを見て分かる日本人がどれだけいるかという。最初に高士と書いていますが、高士というのをうまく説明できる人がどれだけいるか。要は、短い中にいっぱい盛り込みたいと思い過ぎて、格好いい文章を使いたい、語句を使いたいというところから、日本人の理解を困難にしている感じはしないでもないですよ。文科省さん的には、この中で「瀧」という字がありますが、教科書ではこの字は使いませんので、簡単な字を使うべきだなと思うのですが、これはいかにも京博的ですよね。

丁野さんか、佐々木さん、何か御意見ありますでしょうか。

【丁野委員】 丁野でございます。よろしく申し上げます。

先ほど山野さんから、観光の観点からいろんな話が出ました。特に付け加えて申し上げることはないのですが、もともと、観光という面で言いますと、俯瞰をするという意味で、二つの俯瞰の仕方をしているのです。一つは、地形とか、地理とか、そういうものをまず俯瞰する。もう一つは、歴史を俯瞰する。だから、博物館においては歴史を俯瞰するということがとても大事なわけでありまして。本日の議論自体がこれからどういう風に展開するかと、最初から先のことを考えてしまいます。国立や県立の拠点館といいますか、今はその辺のところの議論を中心に展開していくのだらうと思うのですが、実際、多くの

観光地から言うと、人口10万人とか、15万人とか、そういう小さな町の中での博物館の存在はとても重要です。例えば中世の街並みを読み解くみたいな話が出てきたときに、これは、先週末まで行っていました島根県の益田なんかはそうなのですから、普通に町を歩いて分らないのですね、どこが中世の街並みなのか。つまり、近世で上書きされていないので中世が残ったということなのですから、それは、恐らく観光客が歩いて、全く分らない。そういうのが例えば博物館の中できちんとガイドされて、さらにフィールドへ行ってみたいというふうな話があればいいわけで、この議論というのは観光サイドからしっかりそういうところを組み立てをしなければいけないと思います。ですから、将来的にはそういう小さな地域の館の中での在り方も見据えた上で議論を進めていくことが必要だと思っています。もちろん、当面は拠点館ということで、これをだんだん、モデルを作って他の地区に波及させていくというような考え方でいっているのだろうと思うのですが。

もう1点同じことを裏返して言いますと、地域、サイトに出ないと博物館だけでは分らないことが多いですね、例えば、九谷焼でも、消えた古九谷の幻の50年というのがあって、これは現地に行かないと分らない。博物館と現地を見せるというふうな見せ方が当然あるわけですから、そういうのが果たしてどこまでできているか。つまり、観光と博物館の接点というのはその辺にあるのではないかなというふうに、私は思っています。

ただ、冒頭にデータがありましたように、博物館法上の博物館でも学芸員が平均4人ですか。トータルすると1.5人。類似施設で言うと0.76人だったかな？つまり、1人いないのですよね。そういう体制の中で果たして何ができるのかというふうなところを非常に現実的に議論をしていく必要があると思います。これは、座長もおっしゃったように、いきなりそんなことはできないと。できるところとできないところがあるわけですが、その中でどういうふうに丁寧な議論をしていくのかということがとっても必要なのではないかなというふうに感じております。

済みません、簡単ですけど。

【島谷座長】 ありがとうございます。

拠点館間が良くなっていくことによって、ほかのところも助けていくという形に展開していくのが一番いいなあというふうに思っているのですね。さっき山野さんの中で電子チケットがないのはあり得ないということですが、実際問題、私も飛行機も新幹線も携帯で全部とっていますけど、こんな便利なものを何でみんなはやらないのだと思うのだけど、

実はやってない人の方が多いのですね。だから、それが便利だというのが理解できる人を増やしていくということも必要かなあと。新幹線なんかでも、10分前まで変更ができる。紙のチケットでも変更できるのですが、あの行列に並ばなきゃいけないというのは嫌になっちゃいますよね。だから、そういう利便性があるということをご知らせながらそういう形になっていくのがいいのですが、今、丁野さんがおっしゃっていただいたように、学芸員の数が1未満のところをそれを導入するというのは非常に難しいところがあるので、そういう場合は機械だけ置いて、インターネットで全部が共有できるようなシステムを作って、例えばの話ですが、ICOMカードが電子化されて、ピッとやればEX予約ができるような形になれば、日本中の5,500館の博物館がそれさえ導入すればできるとか、そういうようなことも考え得るかなあとは思いますが、まだそれは見通しですが。

佐々木さん。

【佐々木委員】

自己紹介を兼ねて、現場に近いところから申し上げます。私は、東京都歴史文化財団という財団に所属してまして、これは、都立の美術館、博物館、文化ホール、劇場、アーツカウンシルを運営している団体になります。その中で、先ほど出ました江戸東京博物館に就職して、江戸東京たてもの園という、古い建造物を移築・復元した野外の博物館にもおりました。その後、東京都美術館で学芸員の仕事をし、人事異動で今は財団事務局で企画担当をしています。企画担当といっても、事業の企画はしてなくて、専ら経営企画で、もはや2021年以降の中長期計画を都庁と調整しております。あと、もう一つはきょうのお話に関わるのですが、施設の機能向上というふうにくくりで呼んでいるのですけれども、多言語対応、バリアフリー、ユニバーサル化、あとは、ユニークベニュー、ナイトミュージアム、チケットレス、キャッシュレス、共通パスの検討、山野さんがおっしゃったようなことを窓口としてやって、施設とつなぐ役割をしています。結構、障害もいろいろあって、座長も再三言われていますけど、お金が付いても人が足りないとか、いろいろあります。あとは、山野さんがおっしゃってましたように、紙が好きな人が多い業界なので、紙から逃れられないみたいな。チケットは紙じゃなきゃ嫌だと言うお客さんもいますし、図録も重いけど紙がいいみたいな世界なので、なかなか進まないところはあるのですが、2020を境に何とか進めていかなきゃいけないと。

ここから少し課題意識を申します。文化観光の話になるといつも、ルーブルとか、大英博とか、メトロポリタンなどが出てきて、こんな制度でやっていると言うのですね。じゃ

あ日本はどうなのだというと、東博ですと。それは立派です。あと、江戸博にもお客さんいらしていますが、現場としては比べてほしくないわけです。予算と人の規模が2桁ぐらい違う施設なわけですよ。為政者や一般の人はそういうところと比べたがって、何でできてないのみたいな話にすぐなります。現場からすると、ちょっと待ってくださいと。比べるのは余りに酷じゃないかと。そういった、海外のよく名前が出るミュージアム、世界中の誰でもが知っているメガミュージアムみたいなのが富士山だとすると、みんな、形を知っていると。登ったことはないけど認識している。それに比べると、日本のミュージアムは圧倒的に低い山ですね。低い山だけれども、きらりとした、面白い、いい山はいっぱいあるのですね。だから、高尾山みたいな感じ。高尾山がいい例だと思うのですね。我々、高尾山なんて、子どもの頃、ちょっと登ったとか、遠足で行ったみたいなのが、外国の人がいっぱい来ているわけですね。何で高尾山なの？ どこが面白いの？ みたいに思っちゃうわけですよ。でも、その良さを知ると、外国の人も集まってくれる。日本のミュージアムの突破口は高尾山化です。富士山ないから、富士山を見てもしょうがない。高尾山を探しましょうという作戦が現実的かと思っていまして、そういうきらりとしたところの良さを発見して、しかも、小さい、中小規模が多いので、皆さんが手を取り合ってネットワークを作って、みんなで底上げ図っていく。それを引っ張る地域の中核館があったりするところがある、一つ現実的ではないかと思っています。

それで1点、こういうものがあればなあと常々思っているのですけれども、文化観光の仕事を進めるに当たって、ちょっと相談できる場所があるといいなあと。国の機関なのか、どこか、具体には分かりませんが、例えば、先ほど、キャッシュレス、チケットレス、ネット予約の話が出ましたが、怖いみたいな、妙な感覚がある。そこに相談すれば、怖くないですよと、こういうことをやれば大丈夫ですよと、業界内側の言葉で言ってあげるとか。

あと、リンネさんとも以前お話ししたことあるのですけれども、多言語対応していくと、この言葉はこうやって訳すというのが蓄積されていくわけですね。資料についてもそうですし、あと、卑近な例ですけど、案内表示ですね。コインロッカーは、100円入れてくださいとか、お金が戻りますとか、そういうところでもたもたしている外国のお客さんはいっぱいいるわけです。それって、こういうふうに言えば、どこでも使える。いくら小さいところでも、ネットで探せば、この表示をコピーすればトラブルを解消できるとかって、いっぱいあると思うのですね。そういうもののデータベースを作って、オープンデータでミ

ミュージアムの人が使えらというような仕組みができると、それだけでも大分違ってくるのかな。

ICTの活用が出てきて、山野さんのインフラの一つにオーディオガイドが出ていましたけれども、あれもいろんな種類のものがあったりして、何が一番良さそうかとか、手軽かとか、確実かというの、やっぱり分からないのですね。だから、そういう窓口があって、ここのこういうのはこういう良さがありますよ、メリット・デメリットありますよというのを紹介してあげるとか、そういうのがちょっとでもできると、大分現実的なこともできるのではないかと思います。

我々、都立の施設の中でのそういうハブの役割を果たすので、いろんな場で都内の小さいミュージアムの人にも情報共有するように努めているのですけれども、片手間にやっているの、どこかにナショナルセンター的な文化観光のワンストップ窓口があると、みんな、怖さも減り、頑張れるところは頑張れるのではないかなと。ノウハウも共有できて、ためていけるといいなと考えております。

以上です。

【島谷座長】 ありがとうございます。富士山じゃなくて高尾山を目指すというのは分かりやすかったのですが、高尾山が外国の人に何で人気があるかというのはミシュランだと思うのですが、情報発信しなきゃいけないので、山野さんがおっしゃってくださったようなことは、観光を考える場合は絶対やっていかなきゃいけないという。どこからどういうタイムスケジュールでやっていくかって、全員一緒にということになるといつまでもたってもできないので、その辺も考えていかなきゃいけないかなあと考えております。

我々から見ると、こんなこと言っちゃいけないのですが、東博と江戸博を比べたら、スケール違うでしょうと思うのだけど、入館者を見ると江戸博の方が多かったです。これは駐車場の問題なんです。具体的なインフラで観光バスが入るか入らないかって、これは非常に大きい。だから、私がいるときに東博でも大地下駐車場をつくらうかという話もあって、計画が大分行き掛けたのだけど、今は頓挫しているところではあるのですが、物理的なインフラ整備とITのインフラ整備とか、いろんなことをどういう形でやっていくかということは大切で、それは大切だということは、きょう、皆さん、かなり共有できたと思うので、今後、どういう展開にしていったらいいかなあと、この会議も思っているところでございます。

太下さん、言い足りなかったようなので。

【太下委員】　そうですね。そもそもこの委員会のテーマである文化と観光の関係について一言お話ししておきたかったのですが、釈迦に説法の部分も含めてお話しすると、観光庁さんは今、訪日外国人旅行者数、2020年4,000万人、2030年6,000万人という目標を掲げていらっしゃいますよね。2030年6,000万人をもし達成するとなると、結構すごいことで、多分、現状のイタリア並みぐらいです。要するに、日本は世界的に見ても国際的な観光大国になるという、そういう水準なのです。ただ、4,000万人の達成というのはほぼ行くだろうと私は思うのですが、4,000万人から6,000万人に対して、実は大きな壁が一つあります。それは何かというと、現状、日本に來ている訪日外国人観光客のほとんどがゴールデンルートに集中しているということです。東京、富士山、京都、そして関西というルートです。御案内のとおり、新幹線の車内アナウンス、英語は加わっていますが、日本語と英語で微妙に違うのを御存じですよ。あえて外国人だけは、停車時間が短いから、さっさと降りるよというアナウンスが付け加わっている。それだけ、今、新幹線の乗車率、外国人は増えていますが、ゴールデンルートに集中している。このトレンドでいく限り、飽和しちゃってオーバーツーリズムの状態ですから、6,000万人は達成できないのです。だから、いかにゴールデンルート以外に行ってもらえるのかというのは、実は本当に大きな課題です。そして、観光庁さんは既に手を打たれていて、新しいゴールデンルート作りをやっていらっしゃるのです。これを進める上で、地域の文化というのが非常に大きな役割を果たすだろうと考えています。

一方で、日本というのは先進国の中では極めて珍しいのですが、内陸県を除いて、ほぼ全ての県に空港があって、その空港からほとんど国際線が出ているのです。これらの地方空港は、かつては無駄の象徴のように言われた時期もありますけれども、今ここのインフラを生かすべきなのです。要するに、今、羽田も成田も発着容量を増強しようとしているわけです。御案内のとおり、羽田は今まで禁じ手だった住宅地の上空を飛ばすということをや、成田は今の2倍に国際線を増やすと言っているのですが、羽田と成田がそれだけ増強していても、残りの分の訪日外国人をどこかが受け入れなきゃいけないのです。さて、日本は島国ですから、訪日外国人の97%は飛行機で來ているのです。そうすると、残りを全国の空港で今の割合のまま負担させていくとするとどのぐらいの規模になるかという、何と驚くべきことに現状の6倍の外国人を全ての空港が受け入れないと6,000万人は達成できないという試算になります。それは一つの仮定の数字ではありますが、とにかく全国の空港がシェアしていかないと、これは絶対達成できない数字なのです。と

なると、いかに地方空港から入国していただくのかということが極めて重要であり、そのときに、実は文化というのは大きな大きな吸引力になり得るのではないかと思うのです。私は、これは結構重要な戦略だと思っていて、プラス東京と言っているのですが、東京を目指すんじゃなくて、東京は次の目的地で、プラスで来てもらうという形に大きく転換していかないと、多分、6,000万人という目標は達成できない。そのプラス東京を進める上でも、地域の文化、そして、地域の文化の大きな拠点施設になる文化施設を中心とした文化観光の在り方というのが、観光を進める上でも大きな大きな役割を果たすだろうというふうに考えております。

以上です。

【島谷座長】 ありがとうございました。

丁野さん。

【丁野委員】 すみません。時間もありませんので、最後に1点だけ。

今、言い忘れたことがありまして、今日は観光の肩書で参加させてもらっておりますが、実は、アトキンソンさん、リンネさんなんかと一緒に日本遺産をやらせていただいて、これも今年度で100件という数に達するのだらうと思います。それから、日本博とか、「歴史文化基本構想」とか地域計画ですね。こちらの方にも関わらせていただいているのですが、こういう文化政策の一連の議論の中で、ミュージアム、博物館の話は余り出てこないのですね。本来、そこをどう活用するかというようなことで、例えば地域計画で言うと、これはある意味、文化財を活用した地域のビジョンというよりも、むしろアクションプランというふうな格好になっているわけでありまして、その中で拠点になるべきミュージアムというものをどういうふうに組み込んでいくのかということをしっかり議論しなきゃいけないと思うのですが、そういう話が余り出てこない。日本遺産も、実はそうなのですね。日本遺産の場合は、文化財部局だけじゃなくて、企画調整部局とか、いわゆる首長部局がかなり絡んでいて、ほかの関連部局と連携をとりながら、地域活性化というのをやっている。こういう中でもミュージアムが、大原美術館みたいな話は別なのですが、それ以外のところは余り出てこないのですね。ですから、同じ、文化政策、文化行政をやっていく中で、ほかの地域活性化策でおとりになっていらっしゃる、いろんな政策との整合性をどうとっていくかと。これはとっても重要なポイントじゃないかなあとと思います。これを言い忘れてしまったものですから、そこをちょっと提案させていただきました。

【島谷座長】 ありがとうございました。

山野さん。

【山野委員】 補足をさせていただきたいのですが、先ほどのお伝えの仕方、コンテンツの充実があることが前提だというお話をしましたが、もう少し掘り下げると、まず、観光資源として評価ができないコンテンツを持っている博物館あるいは美術館に関しては、今回の議論の対象にすべきではないという前提条件があったのです。これは何かというと、例えば、観光庁でDMOをやりましたとなったときに、広くあまねく全ての地域が積極的に手を挙げてきていただきました。ただ、例えば、ベッドタウンが観光を頑張りたいと言ってもなかなか難しいというのが実際あって、やはり、観光資源が有るか、無いか。観光資源というのは、某氏の名著を読んでいただければ、アトキンソンさんの名著を読んでいただければ、観光資源は何かというのは全部定義されているので、皆さん、読んでいただきたいのですが、観光資源があるところじゃないとなかなか、観光化していく、観光振興していくというのは難しいよねという前提があるので、今回も、広くあまねく全ての博物館を対象にするのだという話ではなくて、まず、文化観光というものに資する博物館はどこかというところが前提条件であると思っています。ここはちょっと説明として漏れていたと思うので、補足させていただきたいというのが1点です。

もう1点ですが、先ほどの五つというのは、限られた時間の中で表現させていただきましたが、お金が掛かるものと掛からないもの、人手が掛かるものと掛からないものがあった、さっきの流れで言うと、電子チケットというところだけインターネットの話なので、インターネットは微妙だよという空気になっていたと思うのですが、電子チケットというのは、ちなみに、お金が掛かるもの、人手が掛かるもの、掛からないものがあるという話の中で、電子チケットは基本的に人手もお金も掛からないものです。逆に掛からないものということです、多分、誤解を招いてしまうと、恐らくインターネット代表としては、何言っとるのじゃいという議事録になるわけで、先に言っておきますねと。

なので、対象としては、文化観光に資する施設を対象にしましょうという前提条件で、そこがあるところに関して、先ほどの名簿登録と一緒に、載っていないとグローバルマーケットあるいは観光産業の中では認知されない恐れがありますよと。なので、お金が掛からず、手間が掛からない、人手が掛からないものから推進していくという考え方は重要なんじゃないかというところで、補足させていただきます。

【島谷座長】 ありがとうございます。誤解がないように、皆さんもそれを共有できたのではないかと思いますので。

時間になりましたので次回以降という話になるかということなのですが、榎本さんの方から5ページで提示していただいた、検討を深めたい観点というのがありましたので、限られた回数の中でこれを消化していきたいと思います。その前提を踏まえながら、できることから文化観光に資するところを精いっぱい頑張っていくって、6,000万人は難しいという話が太下さんの方から出ましたが、数字から見ると、地方空港は6倍にと、今からじゃとても間に合わない数字が出てきたと思うのですけれども、ゴールデンラインに関して言いますと、私も東京と九州をひっきりなしに飛んでいますから、福岡ー東京間が物すごく混んでいるというのは実感しているのですが、新幹線になると、新大阪から先は極端にがらがらになるのですよ。だから、自由席でいい感じなのですね。本当にゴールデンラインはめちゃくちゃ混んでいて取りづらい状況なので、だからこそインターネットの予約は便利だなあというふうに思うわけで、そこにつながるわけですけれども、それ以外の施策をどうしていくかというのを、文化庁さん、観光庁さんとも一緒に考えていかなきゃいけないかと思えます。

進行がうまくいかなくて、小林先生には突然振って十分じゃなかったかと思いますが、次回以降にまた発言していただければと思います。

【小林委員】 はい。

【榎本課長】 ありがとうございます。頂いた論点、多岐になっておりましたが、ざっくり3点で俯瞰いたしますと、まず、1点目、多言語に関して、リンネさんからの冒頭の紹介、その後、アトキンソン委員からの御指摘等ございました。分かりやすい多言語にしていくということが大事であるということ。それから、2点目として、博物館の運営に関する御指摘も多かったと思います。親しまれる場となっていく、楽しい空間であるという、そういったことを前提としながら、インフラということで、解説の提供、オーディオガイド、ガイドツアー、こういった体験的な取組の必要性。また、座ったり、休憩できたり、飲食できる空間の確保。こういった場の形成というお話もございました。加えて、キャッシュレス、電子チケット、Wi-Fi、こういった関係のインフラの御指摘もございました。こうした、博物館が更に、展示物、いろいろなインフラの整備といったことをどうするかという御意見あったと思います。それから、3点目として、非常にいろんな論点があったのですが、地域に根差していくということの必要性の御指摘がありました。地元の方から信頼され期待されていくということが大事であるということ。それから、ちょっと文脈はずれますけども、いわゆるゴールデンルート以外の、全国各地にいろいろ博物館・美術館もあ

る中で、そういったところの魅力の発見と磨き上げといった観点もあろうかと思っております。私、冒頭の資料でも少し申し上げたのですけれども、日本中の全部の博物館を今回の議論の俎上というふうには思っておりませんで、途中にありましたが、意欲のある博物館に対して様々な支援を構築していくということができないかという問題意識で御紹介をしております。

そうした中で、資料3の5ページに7項目ほど挙げておりますけれども、文化施設の持つコレクションやコンテンツの魅力を高めていく。そして、国内外の幅広い来訪者に伝えていくということを明確していきながら、こういった要素を備えていったらいいかということ、事務局として、文化庁、観光庁と相談しながら論点を整理して、次回御覧いただけるようにしたく思っております。

私なりの整理は以上でございますが、もし何か足りない点等ありましたら、よろしくお願ひいたします。

【島谷座長】 非常に簡潔にまとめていただいて、ありがとうございました。問題意識は共有できたと思いますので、次回以降に一つずつ方向性をまとめることができればいいかなと思っております。

時間になっておりますが、何か御意見ありましたら、よろしいですか、各委員の先生方。

お忙しい中、御参加いただきまして、本当にありがとうございました。第1回の会議については、これで閉会したいと思います。ありがとうございました。

【榎本課長】 次回は、12月9日を予定しております。よろしくお願ひいたします。
ありがとうございました。

— 了 —